

## 2009年度 立命館学校教育研究会 総会・分科会

### <目次>

#### 立命館学校教育研究会総会

- ・ 2009年度 年間活動報告
- ・ 2010年度 年間活動計画
- ・ 2010年度 運営委員一覧

#### 立命館学校教育研究会分科会

- ・ 第1分科会
- ・ 第2分科会
- ・ 第3分科会



2009年11月29日(日)に、120名を超える校友教員や教育関係の方々にご参加頂き、2009年度立命館学校教育研究会総会・分科会を開催致しました。今回は、当日の様様をお伝えいたします。

立命館学校教育研究会総会立命館学校教育研究会運営委員の角田将士（産業社会学部准教

授)の司会により、2009年度総会が始まりました。

最初に、立命館学校教育研究会会長崎野隆より挨拶が行われ、引き続いて、運営委員の入江嘉明(教職支援センター主任)より、2009年度の活動報告が行なわれました。会長の崎野より、2010年度の運営委員の提案があり、満場一致の拍手をもって承認されました。

次に、2010年度の活動計画が、運営委員の梅井房雄(教職支援センター副主任)より提案され、総会出席者の拍手をもって確認されました。最後に、立命館大学の教職教育の現状について、運営委員であり立命館大学教学部長の春日井敏之(文学部教授)より報告があり、閉会の運びとなりました。

## ★ 2009年度 立命館学校教育研究会年間活動報告 ★

### 1. 2009年度の活動方針

- (1) 卒業生教員や本学教職希望学生および立命館教職員をはじめ、教育に関わろうとする者の交流、ネットワーク形成のための取組みを行ないます。
- (2) 教職を志す本学学生の力量向上に資する様々な取組みを行ないます。
- (3) 学校教育に関する研究会・講演会等を開催いたします。
- (4) 電子媒体を基本とした方法で、ニュースを発行いたします。
- (5) その他、会員の皆様へ情報を随時発信いたします。

### 2. 年間活動報告について(予定含む)

全体の活動内容

4月 運営委員会

5月 メールマガジン発行

6月 講演会

運営委員会

<後援>教員採用試験受験者と卒業生教員との懇談会(教職支援センター主催)

7月 若手教員懇談会

運営委員会

8月 メールマガジン発行

9月

10月 運営委員会

11月 総会・分科会(研究会)

パンフレット発行

運営委員会

メールマガジン発行

12月 <後援>2010年度採用 教員採用試験合格者祝賀会（教職教育推進機構・教職支援センター主催）

1月

2月 メールマガジン発行

3月

#### 1) 講演会について

日時： 2009年6月14日（日）14時～16時（懇親会16時30分～）

会場： 立命館大学 衣笠キャンパス 創思館カンファレンスルーム

講師： 尾木 直樹氏（教育評論家・法政大学教授）

演題： 「ケータイ・ネット時代と子どもの未来－教育改革の行方にふれながら－」

参加者数：約150名

尾木先生は、ケータイの利便性と危険性を理解しながら、日常生活における人間関係のあり様を改めて問い直していくことが重要であり、新しいネット文化の担い手になっていく中高生を育てることの大切さを強調されました。具体的な事例を織り交ぜながら、ユーモアと鋭い指摘にあふれた講演会でした。

#### 2) 若手教員懇談会について

日時： 2009年7月26日（日）13時～16時30分

会場： 立命館大学 朱雀キャンパス 多目的室

参加者数：約50名

春日井敏之先生（立命館大学文学部教授）を講師にお招きし、「教師というしごと～子ども・親・教師のつながり方～」というテーマにて、ミニ講座が開かれました。同様のテーマにて、小学校、中学校・高等学校、特別支援学校の3つのグループに分かれて、分散会協議も行われ、若手教員からは大きな収穫があった、との声が多数聞かれました。

#### 3. 会員登録について

2009年11月25日現在、1157名の方に会員登録いただいております。

#### 4. パンフレットの発行

★ 2010年度 立命館学校教育研究会年間活動計画（案） ★1. 2010年度の活動方針

(1) 卒業生教員や本学教職希望学生および立命館教職員をはじめ、教育に関わろうとする

者の交流、ネットワーク形成のための取組みを行ないます。

- (2) 教職を志す本学学生の力量向上に資する様々な取組みを行ないます。
- (3) 学校教育に関する研究会・講演会等を開催いたします。
- (4) 電子媒体を基本とした方法で、ニュースを発行いたします。
- (5) その他、会員の皆様へ情報を随時発信いたします。

## 2. 年間活動計画について（予定含む）

### 年間活動内容

- 4月 運営委員会
- 5月 メールマガジン発行
- 6月 講演会  
\*6月6日（日）立命館大学ホーム・カミングデーの一企画として開催予定  
運営委員会  
<後援>教員採用試験受験者と卒業生教員との懇談会（教職支援センター主催）
- 7月
- 8月 若手教員懇談会  
運営委員会  
メールマガジン発行
- 9月
- 10月
- 11月 総会・分科会（研究会）  
運営委員会  
メールマガジン発行
- 12月 <後援>2011年度採用 教員採用試験合格者祝賀会（教職教育推進機構・教職支援センター主催）
- 1月
- 2月 メールマガジン発行
- 3月

## 3. 学校教育研究会のホームページの運用について

- (1) 講演会および各種イベントのご案内をさせていただきます。
- (2) 会員の皆様方に、情報交換や交流をして頂ける場として運営させていただきます。
- (3) 教職教育に関わる情報提供を随時させていただきます。

＜ 2009－2010 年度 立命館学校教育研究会 運営委員・役員について（敬称略） ＞会 長  
崎野 隆 立命館大学教職支援センター 前センター長

副会長 七里 源一 滋賀県教育委員会

副会長 井上 政嗣 雲雀丘学園小学校 教諭

運営委員 村上 晃美 羽曳野市教育委員会 教育委員

運営委員 西山 隆史 京都市教育委員会 参与

運営委員 岡本 真一 神戸市立摩耶兵庫高等学校 教頭

運営委員 近松 浩平 京都市立桂東小学校 教諭

運営委員 山本 佳苗 岸和田市立山滝中学校 教諭

運営委員 木本 正彦 立命館中学校高等学校 教頭

運営委員 畑中 敏之 立命館大学教職教学運営委員会 委員長  
立命館大学教職支援センター センター長  
(立命館大学文学部教授)

運営委員 伊藤 隆司 立命館大学教職教学運営委員会 運営委員  
(立命館大学産業社会学部教授)

運営委員 角田 将士 立命館大学産業社会学部准教授

運営委員 入江 嘉明 立命館大学教職支援センター 主任（衣笠）

運営委員 梅井 房雄 立命館大学教職支援センター 副主任（BKC）

運営委員 長野 光孝 立命館大学非常勤講師  
(立命館大学教職支援センター 前主任＜衣笠＞)

運営委員 春日井 敏之 立命館大学教学部 部長  
(立命館大学文学部教授)

運営委員 徳永 寿老 立命館大学教学部 次長

運営委員 植木 泰江 立命館大学教職教育課 課長

事務局 立命館大学教職教育課

※2008年12月の総会での承認により、任期は2009年度から2ヵ年となります。

※立命館大学より選出されている運営委員については、人事異動により任期内であっても交代します。

★立命館学校教育研究会 分科会

立命館学校教育研究会総会後に、分科会を開催いたしました。

3つの分科会の内容をご紹介します。

<第 1 分科会> 「人権学習の『これまで』と『これから』」 報告者：立命館大学産業社会学部准教授 中西 仁氏

コーディネーター：運営委員 角田 将士

司会：運営委員 畑中敏之

記録：運営委員 入江嘉明・伊藤隆司

(参加者 約 40 名)

報告者の中西仁氏（立命館大学准教授）は、京都市内の「同和関係校」に同和教育担当として勤務した経験を持つ。報告は、そこでの体験に限らず、同和教育・人権学習の歴史的理論的展開過程を、はば広い視野から考察・整理したものであった。

中西氏は、同和教育・人権学習の流れを、「同和教育草創期（1950 年代後半～）」「同和教育高揚期（1970 年代～）」「同和教育の転換期（1990 年代～）」「同和教育から人権教育へ」と整理した上で、「これから」の人権学習においては、「啓発型」にとどまらず、社会参加・協働型人権学習の普及が必要であると指摘された。

中西氏によれば、「今日も机にあの子がいない」というスローガンに象徴される 1950 年代の同和教育の遺産は、「救ってやる」という上から目線ではなく、「差別の現実から深く学ぶ」という姿勢が強調されたことにあった。さらに、1970 年代には、「学力保障」「進路保障」「啓発」を 3 本柱とする同和教育施策が本格化され、さまざまな同和对策事業が展開された。1990 年代に入り、同和对策事業が最終段階・終結に向かう中で、部落差別が「見えにくく」なり、固有の課題としての同和教育は転換期を迎えた。その後、「人権教育のための国連 10 年」（1994 年～2003 年）の提起もあり、人権学習の視野は、女性、子ども、高齢者など、様々な対象へと広がり、参加型の教材・学習方法も開発されてきた。

中西氏は、かつての「啓発型同和教育」が、「科学性」（社会科における部落問題学習）、「感性」（学級集団における人権学習）、「運動」（地域における解放運動）という 3 類型で課題を把握してきたのに対して、その枠組みが見直されてきていることについて、部落史研究の進展もふまえながら解説された。そして、「権利の熱気球カード」を使った最近の人権学習の実践例やそれらが抱える問題点などにもふれながら、「勤務する学校や身近な学校現場ではどのような人権学習が行われているか」「人権学習の新しい実践にはどのようなものがあるか」「これからどのような人権学習が必要になってくると思うか」という点について議論してみたいと訴えられた。

第 1 分科会には約 40 名の参加があり、中西氏の報告を受けて、活発な議論が行われた。参加者からは、いまだに結婚差別や就職差別が存在している現実や、地域における実情の違い、

最近の人権学習の特徴などについて、具体的な事例を紹介する発言があった。また、「今日もあの子が机にいない」→「非行は宝」→「非行は差別に負けた姿」などというように、歴史的スローガンが変遷してきた過程からも学ぶべきものが見えてくるといった指摘や、「福祉」と「教育」、「人権学習」と「人権教育」などの概念整理、「同和教育」の固有の課題の解明といった諸点についても熱く語りあわれた。

分科会参加者にとっては、中西氏の明快な報告により課題意識が整理されると共に、新たな課題を自覚する契機になったに違いない。

<第2分科会> 「学校再生ー地域に信頼される学校づくりー」 報告者： 兵庫県立山崎高等学校教頭 宝谷 亮介氏

コーディネーター： 運営委員 岡本真一

司会： 運営委員 七里源一

記録： 運営委員 崎野隆・村上晃美・長野光孝

(参加者 約 40 名)

第2分科会では他の分科会とは趣を異にし、学校改革・学校経営、地域連携の意義・方策、健全育成・生徒指導の方法、教師集団づくり・若手教員の育成に加え、今日的な教育課題を含む学校現場の具体的な実践報告が行われた。講師として現兵庫県立山崎高等学校教頭の宝谷亮介をお招きし、「学校再生：地域に信頼される学校づくり」をテーマに、前任校での生々しい取り組みを、映像・マスコミ資料を加えて熱く語られた。

最初に、平成15・16年度頃の学校の危機的な状況について、その惨状の一部を放映したTV映像が紹介された。閉塞感が漂い、生徒に押され土俵際で踏ん張っている職員の様子、地域住民から見放され、生徒の通学経路すら変更せざるを得なくなった状況、定員割れを起し統廃合の危機にさらされた状況、茶髪・対教師暴力・喫煙・器物破損が常態化し、「(生徒は)何をしてしても許される楽しい学校」の状況等、会場の全員が固唾を飲んで氏の説明に聞き入った。その後、学校の存続をかけた学校再生の具体的な取り組みが紹介された。改革の方向性、1年(短期計画)・3年(中期計画)の策定・実施、教員集団の再編と意識・行動の改革、学校・学年行事の精選、受検倍率アップの為の広報戦略、地域発信・地域貢献策など、新しい校長と共に教員が一丸となって改革を進めていった。とりわけ平成16年度の「ディスカバリー・ハイスクール計画」以後、「攻め」の学校改革となって、見た目も今までとは違った新しい学校が生まれた。このような経過を、受検倍率推移、入学・卒業者数推移、地元生徒数推移、特別指導件数、進学合格実績の推移のデータと映像を合わせながら説明され

た。

いわゆる「指導困難校」の改革の話題であったが、宝谷氏の明るい姿勢・仲間への信頼感溢れる言動によって、会場の多くの教員・学生は大きなエネルギーを授かったと思われる。高等学校現場の話題ではあったが、小学校・中学校教員（それらを目指す学生諸氏）にとっても、大いに勇気づけられ、参考になる普遍的な話題でもあった。特に、学校改革中における具体的な工夫・先進的な取組みは、ここに記すことが出来ないほど多彩であった。宝谷氏の発表後の質疑応答では、設定時間を大幅に越す事態となった事からも、本発表の奥深さがお分かりいただけたと感じる。

### <第3分科会> 「教育相談の現状と課題」

報告者：立命館大学応用人間科学研究科教授 村本 邦子氏

コーディネーター：運営委員 木本正彦

司会：運営委員 西山隆史

記録：運営委員 梅井房雄・井上政嗣・山本佳苗

(参加者 約40名)

「教育相談」と一口にいても幅広い。そこで会場に集まった人たちの自己紹介と “今、こんな問題が周りにある” という報告・自身の悩み・関心について意見交換をしてから講演がスタートした。

#### 1. スクールカウンセラーから見た子どもの現状と課題

現状は良くなっているとは思えず、閉塞感のようなものを感じる。「不登校」とは現象？。その子の(発達)課題は何か、それを乗り越えるにはどうしたらいいかを考えるときに、個々の課題を見定めないまま方針が決まってしまうことのはがゆさを感じる。学校に戻るタイミングが重要(である)。本人の自発を待つだけではタイミングを逃すこともある。問題解決の方針が決まらなければ前進しない。目的達成のために「しんどいけど頑張る」ことが欠如している。

「友人関係」では携帯やネットに頼りすぎて、コミュニケーションがとれない子どもが増えている。言葉を軽視しその場の感覚に頼る傾向が見られる。ちゃんと言葉で伝えるのが上手ではない。グループに分かれ、もし嫌なことがあっても笑いで流すことも。(自分の気持ちを伝えたいけど言い方がわからなかったり、その場のムードを壊したりするのがイヤ。) 気持ちを伝えるプロセスを経て関係が構築されるのに、挑んでいけない子どもが多い。塾や習い事で自由時間も少なく、生まれたときから与えられることに慣れ、どうしたらいいか訓練・失敗する機会もないので“主体的に選べない”子どもが増えてきている。

## 2. スクールカウンセラーから見た親の現状と課題

親も子どもたちと同じように育ってきているので“未熟”な親になってしまう。子どもを所有物のように思う親や優等生しか受け入れない親も多い。背景には親自身の視野の狭さがある。エリート＝幸せという考えや自分だけが良ければいいという価値観の貧困さも大きく影響している。子どもたちにいろんな生き方を見せる教育や体験させる教育が現代に欠けているのではないか。

## 3. 教育相談とカウンセリング

子どもに接する人たち全員が同じようなカウンセリングマインドでは子どもは現実原則がわからなくなるので役割分担が必要になる。カウンセリングは“子どもに寄り添う”、教育相談は“現実原則を見せ、背中を押す”ことがポイントである。両方を折り合わせながら子ども自身が自分のあり方を少しでも快適なように持っていける力をつけることが大切である。解決策を自分で見つけ出せる力を育てることは必要なのである。

## 4. 教員のメンタルヘルス

教員は「人を育てる」ことの大変さを背負っていかねばならない。また、教員は管理職と保護者にはさまれるストレスを常に感じることになる。職場の人間関係が子ども以上に教員のメンタルヘルスに影響することも多い。チームで支え合う職場の土壌づくりが必要不可欠である。「しんどくても頑張っていこう」とやりがい・信念を持つ考えの人が多くなると教育も充実する。子どもの出した結果のみの評価ではなく、プロセスの評価を重視していくことに視点を向けることを忘れがちである。

質疑応答では“チーム会議”（一人の子の課題にクラブ顧問や担任などその子をよく知る複数教師が情報交換して支える体制をつくり、専門のカウンセラーが教員に対してスーパーバイズし、子どもの発達課題を明確にした上で、今後の方針を決定していき、問題解決の方向を検討する）、小中連携・校内での役割分担・教育を通じて個々の成長を促すことの大切さなどが話し合われた。

分科会の報告は以上です。

2010年度も、講演会や分科会等の様々な企画を予定しております。併せて、電子媒体を中心として、メールマガジンを発行致します。本会ホームページ上での交流もあわせ、皆様のご参加、ご協力をよろしくお願い致します。

次回号では、2010年6月に開催予定の講演会のご案内を致します。